

平成22年 6月 7日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20730503
 研究課題名（和文） カリキュラム・マネジメントの実効化に関する実践的研究

研究課題名（英文） A Study about the Practical Use of Curriculum Management

研究代表者

赤沢 早人 (AKAZAWA HAYATO)
 奈良教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：50380374

研究成果の概要（和文）：カリキュラム・マネジメントをもとにして各学校が学校改善を行って
 いくための観点として、①学校課題の明確化、②学校教育目標の見直し、③学校教育目標に基
 づく教育活動の組織・運営、④学校評価の実施・改善、⑤学校組織・文化の醸成を挙げるとと
 もに、それぞれの観点における具体的なストラテジーを提案した。

研究成果の概要（英文）：This study clarified 5 strategies to proceed school improvement
 based on curriculum-management-approach; (1)School Problem, (2) School Objectives, (3)
 Organized Implementation, (4) School Assessment, (5) School Organization & Culture.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：カリキュラム・マネジメント、アクション・プラン、校内研修、教育課程、学校
 づくり、授業改善、カリキュラム文化、教育目標

1. 研究開始当初の背景

我が国の学校教育の現場では、「特色ある
 学校づくり」を目指す教育政策の方針を背景
 としながら、各学校が特色をもった教育課程
 を立案・計画・実行する動きが活発になって
 いる。こうした流れのなかで、従来の教育課
 程経営に代替する概念として、カリキュラ
 ム・マネジメントという概念が、とりわけ学
 校経営ならびに教育課程の分野で注目され
 るようになってきている。

中留武昭は、カリキュラム・マネジメント
 を次のように定義づけている。「教育課程行
 政の裁量拡大を前提に、各学校が教育目標の
 具現化のために、内容、方法とそれを支える
 条件整備との対応関係を確保しながら、ポジ
 ティブな学校文化を媒介として、カリキュラ
 ムを作り、動かし、これを変えていく動態的
 な営みである」（中留「カリキュラム・マネ
 ジメントによる学校改善」田中統治編著『確
 かな学力を育てるカリキュラム・マネジメン

ト』教育開発研究所、2005年、53頁)。かいつまんで言えば、各学校の教育課程の計画・実行について、これまで主流だった官僚主義的な態度を取るのではなく、学校長をリーダーとした教職員集団が、目的・利害共有集団として、動的で創造的な態度を取ろうとする思想であり、また方法であるということだ。

しかし、カリキュラム・マネジメントという概念は、まだ理想的・観念的な側面が強く、具体的に各学校をどのように改善するものかのストラテジーを示すものにはなっていない。

2. 研究の目的

教育課程の立案・計画・実行において、「私の学校」で「今年度（あるいは次年度）」という具体的・実務的なレベルで、カリキュラム・マネジメントの思想と方法はどのように機能しうるか（あるいはすべきか）、そしてそうしたアプローチを通して、各学校がどのように自校の教育課程を創造的に「つくり、動かし、これを変えていく」ことが実効的に可能であるかどうか、こういうことについて、理論面と実践面の両面から明らかにすることが、研究の目的である。

具体的には、カリキュラム・マネジメントの思想ならびに方法に基づき、各小・中学校が年度当初に、教育課程に関するアクション・プランを策定する際の諸条件を明らかにするとともに、その実効化に向けて策定されたアクション・プランを、各教員の授業実践レベルにまで反映するための具体的な方策を開発する。

3. 研究の方法

教育課程の計画・運営ということに関して、現在の学校現場がとりわけ大きな課題を抱えているのは、年度末から次年度初頭にかけて行われる「評価」(Check) → 「改善」

(Action)・「再計画化」(Plan)のプロセスの部分である。誤解を恐れずに言うと、前年度の反省が次年度の改善・再計画化に具体的に生かされていないことが多いということだ。これは、各学校・教師の努力が足りないということではなく、(1)このプロセスが文書処理事項として官僚主義的に処理されてしまうカリキュラム文化や、(2)改善・再計画化がいわゆるアクション・プラン（行動計画）の形式になっておらず、次年度への具体的な改善指針になり得ていないというカリキュラム実践が主因であると言えよう。

そこで本研究では、カリキュラム・マネジメントが描く大きなプラクティス・サークルのなかでも、とりわけこのアクション・プランの策定の部分に重点化して研究を進める。具体的には、次のことを明らかにする。

(1) 年度末の「評価」では「何」を、「どのように」評価するのか。また、「各校の課題」をアクション・プランに変換していくためには、「どのように」すればよいか。【年度末の「引き継ぎ」にかかる校内研究・研修の問題】

(2) 新年度当初の学校組織の立ち上げに当たって、教職員集団を教育課程に対する創造的集団にしていくためには、どのような組織化が望ましいのか。「誰」が教育課程の立案・計画・実行を担うべきなのか。【年度当初の「立ち上げ」にかかる校内研究・研修および組織体制の問題】

(3) 教育課程の立案・計画・実行を、いわゆるスクールリーダーやミドルリーダーの専権とせず、教職員集団全体の創造的仕事として見なし、実行していく文化をどのように生み出すか。【カリキュラム文化づくりの問題】

(4) こうしたカリキュラム文化を基底におきながら、策定されたアクション・プランを各教師の日々の授業実践に反映させていくためには、具体的に「何」を「どうすれば」よいか。【アクション・プランの授業実践化の問題】

4. 研究成果

平成20年度においては、次のような研究成果をあげた。

(1) カリキュラム・マネジメントに関連する著作、論文を蒐集し、その内容を整理した。

(2) カリキュラム・マネジメントにかかる実態を明らかにするため、公立の小学校で聞き取り調査を実施した。

(3) 独立行政法人・教員研修センターが主催する「カリキュラム・マネジメント研修」(平成20年12月)において、受講生である各地の学校の教員(カリキュラム・マネジメントにかかる地域リーダー的存在)に研究協力を依頼した。

(4) [Do! Action!シート]の試行版を作成し、カリキュラム・マネジメントに関する教員研修(教務主任クラス)において配布を行った。

以上の研究を通して、カリキュラム・マネジメントの実効化に関して、各学校内においては、その目的や意義は理解されても、「誰」が校内におけるその担い手(リーダー)になっていくのかについて、また、具体的にどのような「手順」でそれを進めていくのかについての十分な共通意識が醸成されていないことをおもに明らかにした。

次に、平成 21 年度においては、次のような研究成果をあげた。

(1) 平成 20 年度に制作した「カリキュラムをみんなで創りましょう！ DO！チェックシート」を小・中学校の教務主任等に配布し、その実効性について検証した。

(2) カリキュラム・マネジメントに関する学校内での手続きや方法論（特に年度末から新年度の引継ぎを中心に）などを明らかにするため、京都市や宝塚市の公立の小学校で聞き取り調査を実施した。

(3) カリキュラム・マネジメントを教職員集団全体の創造的仕事として実施していくための方法論として、ワークショップ型の校内研修・研究の理念および方法論について検討するとともに、各地の教育センター等の講師として実践を行った。

(4) リーフレット“「いい学校」の創り方—カリキュラム・マネジメントによる学校教育活動の改善”を作成し、教育行政および教育方法の研究者、小・中・高等学校の学校現場、各地の教育センター等に配布した。カリキュラム・マネジメントの実効化に関して、各学校内においては、その目的や意義は理解されても、「誰」が校内におけるその担い手（リーダー）になっていくのかについて、また、具体的にどのような「手順」でそれを進めていくのかについての十分な共通意識が醸成されていないことを、文献研究や各学校での聞き取り調査を通して明らかにした。

以上の研究を通して、カリキュラム・マネジメントの実効化に関して、具体的な学校改善の観点として、①学校課題の明確化、②学校教育目標の見直し、③学校教育目標に基づく教育活動の組織・運営、④学校評価の実施・改善、⑤学校組織・文化の醸成の観点から取り組みを進めていくための方法論を提案した。

研究全体の成果として、リーフレット“「いい学校」の創り方—カリキュラム・マネジメントによる学校教育活動の改善”を作成し、教育委員会や学校等に配布した。このリーフレットは、実際に各学校でカリキュラム・マネジメントをもとに学校改善を進めていく時の手引書であり、ワークシートでもある。カリキュラム・マネジメントの実効化をストラテジーレベルで提案する本研究の成果として、これまでに国内でひろく発表されたことのない新たな成果物を作成することができた。

リーフレットは次のような構成である。



資料 1 リーフレット表紙

- (1) 今の学校の課題に迫る
- (2) 問題 1 一体何の役に立つのか
- (3) 問題 2 具体的に何をするのか
- (4) 問題 3 いつからそんなことが言われるようになったのか
- (5) 問題 4 誰がそれをするのか
- (6) 問題 5 どこから手を付けるか
- (7) 改善 1 学校課題をどう見据えるか
- (8) 改善 2 教育目標をどう見直すか
- (9) 改善 3 教育活動をどう組織するか
- (10) 教育成果をどう評価し、改善に結びつけるか
- (11) 学校文化をどのように築くか
- (12) はじめの第一歩シート
- (13) 「いい学校」への道しるべ
- (14) 参考文献一覧

これらの項目のそれぞれにおいて、各学校が具体的にどのように問題を捉え、解決へ導いていくかを構想し、実施していくための基本的な情報を記述した。同時に、ワークシート形式を取り入れ、教育センターや学校での研修・研究の際に教員が協働的にそれぞれの項目について構想できるように工夫した。

2 具体的に何をするのか？

社会や家庭が学校に求めるニーズは、大きく変化してきています。このリーフレットでは、各学校がそうしたニーズに対応した「いい学校」として成長していくために、カリキュラム・マネジメントという、学校現場ではあまり聞きなれない言葉を紹介します。

カリキュラム・マネジメントとは何か、一言でいうと、学校をよくなっていく（学校改善）ための理念と方法論をまとめたものです。もともとはアメリカの学校で使われていたようです。この言葉をいちはやく日本に紹介した研究者は、次のように定義しています。

教育課程行政の裁量拡大を前提に、各学校が教育目標の具現化のために、内容、方法とそれを変える条件整備との対応関係を確保しながら、ポジティブな学校文化を醸成として、カリキュラムを作り、動かす、これを変えていく動的な営み

出典 申請課題「カリキュラム・マネジメントによる学校改善」
田中耕治編著『確かな学力を支えるカリキュラム・マネジメント』教育開発研究所、2008年、83頁。

学習領域という観点から見ると、学校の制度的・経営という側面と教育行政に、教育活動の具体的な展開という側面で教育方法に、学校や教員組織の文化という側面で教育社会学に、それぞれ接していると言えるかもしれません。ともあれ、学校の管理的側面と教育的側面の両方を含み込んだ、非常に広い意味が込められているのです。

さてここでは、カリキュラム・マネジメントで具体的に何をやるのか、このパンフレットでは、以下のよう
な5つのミッションに分けることを提案します。



「いい学校」を創るための5つのミッション

資料2 リーフレット構成例

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(4件)

① 赤沢早人、教育活動を支えるカリキュラム・マネジメント、査読無、初等教育資料、839号、2008年、pp.68-71

② 赤沢早人、学力とテストの時代③、査読無、フクト編『Plus』、2008年3号、2008年、pp.2-5

③ 赤沢早人、『確かな学力』と基礎・基本の徹底—学力とテストの時代②—、査読無、フクト編『Plus』、2008年2号、2008年、pp.2-5

④ 赤沢早人、『学力低下』のシュプレヒコール—学力とテストの時代①—、査読無、フクト編『Plus』、2008年1号、2008年、pp.2-5

〔学会発表〕(計1件)

① 赤沢早人、学校教育目標の規定要素と機能—カリキュラム・マネジメントの観点から—、教育目標・評価学会、平成21年11月30日、京都市・京大会館

〔図書〕(計1件)

① 田中耕治編著、赤沢早人 他、よくわかる教育課程、ミネルヴァ書房、2009年、pp.34-47

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://mailsrv.nara-edu.ac.jp/~akazawa/e-gakkou.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤沢 早人 (AKAZAWA HAYATO)

奈良教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：50380374